

<書評>山岸はじめ著『万葉集・世紀末の光 芒-大伴宿禰家持試論-』

金川, 正治

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

101

(終了ページ / End Page)

102

(発行年 / Year)

1984-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019422>

山岸はじめ著

『万葉集・世紀末の光芒』

——大伴宿禰家持試論——

金川 正治

山岸はじめ氏の著書『万葉集・世紀末の光芒』——大伴宿禰家持試論——を読んだ。これは、氏の所属する短歌結社の機関誌である「樹木」誌上に連載された論文に若干手を加えて書きあげたものだという。氏自身はその巻頭言で「本書はもちろん、学問上の著述ではない。いわばエッセイ風な『試論』に過ぎない。」と述べているが、万葉集研究がますます微細化し、ともすれば歌そのものの構築している世界というものを離れてしまいかねない今日の現状にあって、歌の本質・中核に即して論を進めようとする氏の態度は、いわゆる研究者が時として忘れがちな研究の原点というものを、我々に思い起こさせてくれる。というわけで、大いなる関心をいだいて、この書を読みはじめた。

本書は、「一」の章「二」の章」という二部構

成になっている。前半の「一」の章は十節からなり、後半の「二」の章は十三節からなっている。

「一」の章は大体が家持前史というべきもので、大伴氏の出自・家系から、家持の父・旅人や叔母・坂上郎女に至る、歌人・家持が形成されてゆく上でのエピソードを選びとって論じている。もちろん、家持自身についても論及しているが、ここでは主として家持を、その外周から把握しようとする立場で、論が進められている。これは、家持という一歌人（氏は彼を歌人としてのみではなく、奈良朝高級官僚の一人としても、同時に把握しようとしている）を、全人格的に把握しようとするための企てのあらわれだが、しかし「家持試論」として本書を読み始める我々読者は、そこでオヤツと、幾分とまどってしまう。確かに、家持前史なくしては、家持という存在自体もあり得ないわけだが、その前史としての各節が、どうもあまり有機的に連繫していないように思えるのだ。したがって、読む立場からは、どうしても冗長という印象を受けてしまう。全円的に把握するという企図に、逆に氏自身が掘めとられてしまって、焦点が定

まりきらなくなってしまうのだろうか……

それぞれの節で述べられているそれぞれの論には、首肯させられる点も多いのだが、さてそれでは、全体としては何を言おうとしているのだろうか、と考えるとき、前述したように、その焦点がぼやけてきてしまうのだ。むしろ、これぞという二・三の事柄に的を射して、そこから家持前史を構築していった方が、仮に一面的になってしまったとしても、もっと活きいきとした前史となったのではないだろうか。氏が、家持を全円的に把握するためにかなり力を入れていることを考えると、その点が少々残念でならない。

そのような観点から見ると、「二」の章、すなわち本論であるところの「家持」論についても、ほぼ同様の印象を受けてしまう。この章では、家持の少年期、恋愛・結婚生活、官人生活、文学（和歌）観等々を、半ば編年的に追ってゆく。その中で若干気になったところを、以下に述べようと思う。

本章の第一節末尾の部分で、氏は次のように述べる。

最も根本的な考察は、家持は歌人——文芸の徒として身を立てようとする志向したの

ではない。家持にとって文芸は天平貴族の風流ごとであって、高級官僚としての栄達を願うことが本領であった。そういう外延と内包を含むものとして、家持の歌の世界をみたいと思う。

確かにそのとおりかもしれない。家持を全人格的に把握しようとすれば、このような観点から考察してゆかなければならないのかも知れない。しかし、家持の歌々を「天平貴族の風流ごと」と、簡単に割り切ってしまうてよいのだろうか（氏のいう「風流ごと」に対する私の理解が誤っているのかもしれないが）。例えば、氏自身も絶讃している巻十九・巻末の、いわゆる「春愁三首」にしても、それを「天平貴族の風流ごと」と割り切ってしまうところからは、何も出てこないのではないか。もちろん家持は、官人としての日常生活しており、「歌にあらずは撥ひがたきのみ」という彼の「悽惻の意」も、そういった官人としての日常生活から発したものであるかもしれない。しかしそれにしても、その「悽惻の意」と彼の「歌」とが、どのようにして出会い、そしてぶつかりあってゆくのかというそのせめぎあいの過程の中で、「春愁

三首」において構築された世界は問題にされなければならぬだろう。

また氏は、第十二節では、

彼は、防人らの歌に和して、長短歌を三回にわたり詠んでいる。しかし、それは私的な同情歌の域を脱していない。私は、家持が歌作りとしての限界を知ったことと思う。その詩への認識が、やがて作歌の筆を捨てた要因の一つになったと考えるが、どうであろうか。

と述べている。「私的な同情歌の域を脱していない」とはどういうことなのかがよくわからないが、氏がそれを否定的な意味で言っていることは明らかである。しかし、家持が防人たちに同情して作った歌々は、それほど凡作だろうか。そこにはひとつの達成があるように思えるのだが……。また、ここで家持が自らの歌作りとしての限界を自覚し、歌を放棄する一因となっただろうと言うのだが、仮に、防人たちに同情して作った歌によって家持が自らの歌作上の限界を感じたとしても、彼が歌を単なる「風流ごと」と意識していたのなら、彼は、数十年の永きにわたって親しんできた「作歌の筆」を捨てる必要はな

かったのではないか。むしろ、彼がそこに自己の存在を賭けていればこそ、そのようなこともあり得るのではないか。

更に、最初に触れたように、氏は家持の歌の本質・中核に即して論を展開してゆこうと述べておられたが、その歌とのつながり方、歌へのこだわり方が、いくらか弱いような気もする。もっともつと歌そのものにこだわり抜いてよかったのではないか。これも、家持の全円的な把握ということに、自ら束縛されてしまったためではないだろうか。

批判めいたことばかり書き連ねてしまったが、逆に言えば、それだけ私としても触発される場所が多かったということである。御容赦願いたい。家持について考えてゆく上で問題点は、そのほとんどが本書に網羅されていると思うし、また家持像の概略も、簡明によく示されていると思う。それらを、短歌実作者であるという、その感性との衝突の相において論じてくれたら、本書は、更に強くアピールする書となったのではなからうか。今後の深化進展を期待してやまない。

（一九八四年八月 至芸出版社刊定価一五〇〇円）